

ぶっちゃけインタビュー
照屋勇賢 あきや ゆうけん
現代美術家
10
トイレットペーパーの
芯に、
「ヤンバルの森」が宿る



—今年(二〇一五年)は、戦後七〇年、
沖縄返還(※)から四四年目です。照
屋さんは、返還の翌年一九七三年の
生まれですが、占領時代につながるよ
うな記憶はありますか。
—そのように聞かれると、トタン葺き
の建物が並んでいて、今よりはずっと
空の部分が大きかった風景が浮かんで
きました。そんなガランとした通りつ
ていうのは、自分でつくってしまった記憶
なのかもしれないですけど…。
—戦後三〇年以上経っていたのに、まだ
バラックがあった。

ノグチゲラに
小さな魔法をかける

—もしかしたら、バラックが風景の中で
異質だったから、印象に残ったのかもし
れないですけど…。

—虫遊びが大好きな子どもだったん
ですね。
—自然がありましたから。降りられる川
もあったし、畑もまた多かった。バツとか
カエル、オタマジャクシとかに触られる機
会が、今の小学生よりは多かった。

—学生の時、友人の家でトイレットペ
ーパーの芯が幹になり、そこから沖縄
の県鳥ノグチゲラ(※)が浮かんでつ
くられたと言っていますが、すぐ姿
が思い浮かぶほど記憶が鮮明だった。
「Corner Forest」(写真②)と

トイレットペーパーの芯からキツツキが出てきたり、
沖縄の伝統工芸の紅型の柄に、オスプレイやパラシュート部隊と、
四季の自然の彩が同居している。
敵対する世界が、一つに溶け合って美しい。
異質なものを飲み込む、
照屋勇賢さんの芸術の力は、どこからくるのだろうか。



「結い-You I」2002年 佐喜真美術館所蔵(写真①)

©佐喜真美術館